

# 書を通じて伝統文化を継承し 新しい可能性も拓きたい。 そうして選んだ書家としての歩み。

学生時代に「書家を目指したい」と言ったら両親からは猛反対されましたが：

——幼い頃から書に親しまれていたそうですね。

「書に親しんだ、というのは大げさですが、家族に言わせると一歳の頃から筆や墨をおもちゃ代わりにしていたようです(笑)。これは父が書家として活動していたので生活環境の中で筆や墨がごく身近な

ものとしてあったせいだと思います。ただ、書道(習字)については小学校の時から授業として学んでいましたし、父の仕事のこともあつて書というものがごく普通に日常生活のサイクルの中に入っていたことはたしかですね。

一方でサッカーや水泳にも夢中になっており、まあ普通の少年時代を過ごしていました。ですから将来的に書の道へ進むというような考えはとくになく、もちろん個人的に『書道とは何か』といったような大上段に振りかざした意識を持つこともなかったです」

## 書家 福田 匠吾 (ふくだ・しょうご)

昭和62(1987)年、京都生まれ。父は書家として著名な祥洲氏。幼い頃から書(習字)に親しみ、京都精華大学人文学部社会メディア学科卒業後にプロの書家として活動を開始した。伝統的な書の技と意匠を継承するだけでなく、商業デザイン分野にまで創作のウイングを広げるなど独自の活動を展開。また、小学生以上の子供たちを対象に書を通じて一人ひとりの個性を生かし、豊かな想像力を育むことを目指す書道教室(「墨翔会木津川グループ」)を主宰し、次世代の育成にも取り組む。



して活動を開始した。伝統的な書の技と意匠を継承するだけでなく、商業デザイン分野にまで創作のウイングを広げるなど独自の活動を展開。また、小学生以上の子供たちを対象に書を通じて一人ひとりの個性を生かし、豊かな想像力を育むことを目指す書道教室(「墨翔会木津川グループ」)を主宰し、次世代の育成にも取り組む。

——父上から後継者として書家の道に進むように言われたことは？

「それはまったくありませんでした」

——では、書家を目指すようになったのはいつのことですか？

「私自身が書家への道というものを考えるようになったのは大学生の頃です。そのきっかけとなったのは父と

関係者の方々によって開催されたチャリティーイベントでした。

このイベントは書をテーマとしたもので、私もスタッフの一人としていろいろなお手伝いをしました。印象に残ったのは会場にいられた皆さんがひじょうに生き生きとした表情をされていたことです。それは



▲作品「上昇」

ものすごく魅力的なものとして私には映りました。こういう方向に自分も歩み出すことはできないかなあ、と思ったんです。それを生かすための道として書の世界に関わることを選べばいいんじゃないかと思ひ、父と母に私の気持ち伝えました」

——ご両親の反応はいかがでしたか？

「二人とも猛反対でした(笑)。書家になる、あるいはそれを目指す道はそんなに甘くない、苦労するのは目に見えているぞ、というわけです」

——でもご自身としては書家への思いは断

ちがたく、その意思を貫きたかったと。

「ええ。大学の卒業を控えていたので就職活動に取り組んだのですが、その一方で家にこもって書の練習を重ねました。学生時代最後の卒業旅行にも行きませんでした。一度だけ友人たちとスノーボードを楽しみましたが、その時も筆と墨、紙を宿泊先に

持参して常に書に向き合うことを自らに課しました。この時期は私としては修業期間のようなものだったと思います」

——書家としての生活をスタートされたのは大学卒業後(平成21年)ですか？

「はい。自身の書への姿勢、その取り組み方など日頃の行動を見てもらった結果なのかどうかわからないのですが、そこまで書にかける思いが本気なら応援しよう、ということでも両親も書家への道を進むことを認めてくれたのです」

訪中団参加が私にとつての転機を生み書家を目指す方向を見定めることができました

——とはいえ年齢的には二十代の前半です。プロとしての生活を維持するのは大変だったのでは？

「その通りです。大学を卒業してプロになったのですが、もちろんすぐに書家としての仕事が入ってくるわけはありません。しばらくは日々の収入を得るために大手スーパードアでアルバイトをし、なんとか自

立できるための道を模索しなければなりませんでした。

具体的にはバイトをする一方で、書家である父のアシスタントとしてさまざまな雑用をこなしました。たとえば資料の入ったカバンを持ちたり、訪問先で靴を揃えたりとか(笑)。でも、いま振り返ればすべて貴重な経験だったと思います。少なくとも私にとっては何ひとつムダなものはありませんでした」

——プロとなった以後、父上から何かアドバイスはなかったのですか？

「それはなかったですね。いくら著名な書家の息子であっても特別扱いはしない、というの是一貫しており、現在も変わりません。私が書家としての看板を掲げようとした時、プロの道は甘いものじゃない、苦勞するぞと言われていましたからそれは当然だと思えます」

——そんな中で転機をもたらすことになったのが平成 21(2009)年の訪中団への参加だったそうですね。

「ええ。もともと書の芸術は中国由来のものであり、4世紀には書聖・王羲之、8世紀には顔真卿など歴史に残る書家を輩出しています。それを受け継ぐ形で日本独自の書



▲作品「正寿院」

「実は帰国してしばらくのち、先生からお手紙をいただいたので



▲筆、墨、水滴、硯などにはこだわるが、中でも硯は「老坑」という最高級品

道文化が生まれました。

平成 21年は顔真卿の生誕千三百年にあたり、それを記念して文化の歴史的な交流を踏まえて日中間の親善をより深めるための訪中団が組織され、父もメンバーの一人だったのですが、どうしても都合がつかず代わって私が参加することになったのです」

——当時は22歳。訪中団の中では最年少ですね。

「そうです。若かったせいとか、あるいは有名な書家の先生方の一行に参加して気持ちが高ぶっていたせいとか、ある先生に生意気にも書道についての議論を吹っ掛けたんです。先生は憚然とされ、とくに反論もされま

す。そこには『君が書家として歩むこと、その頑張りを期待している』旨のメッセージが書かれていました」

——書家として認められた、ということですか？

「それはわかりません。ただ、先生からのメッセージを受け取った時、すごく嬉しかったことを覚えています」

——そこからプロの書家として生活が本格的にスタートしたんですね。

「はい。先生はすでに故人となられているのですが、ひとつの出会いが人を変える、新しい人生への第一歩を築く…そんなことを教えていただいたと思います。私自身もそうしたことを実感として受け止めましたし、自らの変化を感じました」

——そのことが今日に続く書家としての歩みを後押しし、その道を揺るぎのないものにしたと言っているのでしょうか？

「そう思います」

書は日本文化の精華のひとつ  
その伝統を次世代に伝えたい  
：…という思いがあります

——ところで書道教室は訪中から2年後の平成 23年。木津川市(京都府)で始められました。書家とは違う方向だと思えますが。

「書家としての精進を重ね、自身のレベルを高めることは私にとって生涯終わることのない課題ですが、同時に次代を担う子供たちに習字(書)を通じて伝統文化の素晴らしさを伝え、それを受け継いでほしいという思いが強くなりました。そのことが書道教室につながったのです」

——教室ではどのような指導をされている

んですか。

「一人ひとりの個性や技量に応じた指導を心掛けています。具体的には生徒の目の前でその子に合わせたお手本を書いたり、墨絵の授業を行ったりするなど墨翊会独自のカリキュラムを活用して生徒には基礎をしっかりと学んでもらいます。それとともに留意しているのが書を学ぶ『楽しさ』を伝えることです。楽しくなると上達も早くなりますからね」

——それはその通りですね。楽しくなければ上達も見込めません。

「最近ではデジタル時代とかAI環境とかが話題になっていますが、日本人に限らずほとんどの民族にとって文字を書き、意思を伝えることは文化の形成につながります。こうした営みは普遍的なものではないでしょうか。私自身まだ若く微力ではあるのですが、書家として、また書道教室の指導者として伝統文化の継承と発展に関わりたいと思います」

——その姿勢に共感します。



▲福田匠吾先生の掲載書籍

様々なツールを通じて書の魅力をアピール